「多読 to 読書」プロジェクト 2014
―英語多読学習を介した日本語読書習慣づくりにむけて―

荒　木　陽　子

はじめに

大学生の読書離れが指摘されて久しい。2014 年 2 月 27 日付の『日本経済新聞』社会面に掲載された 2013 年秋の全国大学生協連「学生生活実態調査」の結果によれば、大学生 1 人当たりの 1 日の平均読書時間は 26.9 分、さらに 4 割を超える学生は読書しないという。(1) この調査結果は、飯田一史が『ベストセラー・ライトノベルのしくみ』（2012）で指摘する、初中等教育機関における読書量増加傾向とは相反するものであり興味深い。(2) 飯田の説は、林公らが 1980 年代に提唱した「朝の読書運動」の普及をその要因としているが、前掲の新聞記事が事実を伝えているとすれば、林自らが『朝の読書――その理念と実践』（2007）において提唱し、「『みんなでやる』『毎日やる』『好きな本でよい』『ただ読むだけ』」を合言葉に、(3) 多くの初中等教育機関において行われていた朝読書は、生涯教育へとつながる読書習慣の形成には必ずしもつながっておらず、学生は担任教員やホームルームという強制力を失うと同時に読書習慣を失ってしまう可能性を示唆する。出版物流通大手、トーハンのウェブサイト上に公開されている、朝の読書推進協議会実施の平成 27 年 11 月の調査によれば、全国の初中等教育機関の 76%、そして本稿が取り上げる「多読 to 読書」プロジェクトが行われている北海道でも 68% が「朝の読書」を実施しているというから、その効果が一時的なものであるとすれば残念である。(4)

筆者が北海道情報大学で実施している「多読 to 読書」プロジェクトは、この高校から大学への進学の際に発生することが予想される「読書ギャップ」を、大学の一般教養の英語の授業でしばしば行われる英語多読学習を介して埋めようとする試みである。そしてそれは、英語多読教育を介して、読書習慣のない学生にはそれを身につける機会を提供するとともに、読書習慣を身につけつつあった学生に対しては、それを生涯教育に向けて維持ないしは強化する可能性を探る取り組みでもある。

本稿は第 1 章で現在進行中の同プロジェクトのあらましを紹介する。そして第 2~3 章では実施初年度である 2014 年度 11 月に行った学生アンケートの結果を中心に、プロジェクトの進捗状況の報告および学生のプロジェクト、特に英語多読学習の認知度とそれに対する反応を考察する。そして、文末では現時点でのプロジェクトの効果とともに、今後のプロジェクトの改良のために、2014 年度プロジェクトが提示する問題点と今後の課題を明らかにしたい。

1．プロジェクト概要とその特徴

本プロジェクトは主として北海道情報大学 2014 年度入学生のうち、プレイスメント・テストの結果、初年次 7 レベル展開の必修科目「基礎英語」において最上級クラスに配属された経営情報学部、情報メディア学部、そして医療情報学部に所属する学生 59 名を対象に実施した。詳細は他稿に譲るが、2015 年度は筆者の担当する 2 年次選択必修教科「実用英語」を継続して履修した学生 7 名を追跡調査している。サンプル数が少なく、本研究を一般化することは困難であるが、英語を専門としない大学 1 年～ 2 年生を対象とする一般教養英語クラスにおいて、多読学習を実施する際に参考のひとつとなり得るケーススタディとしての意義はあると思われる。

本プロジェクトの主たる特徴は、(1) 英語多読学習を母語である日本語の読書習慣の定着、強化に結びつけようとする点、(2) 英語多読学習用に開発された書籍のみならず、ヤングアダルト文学（以下、表の中では YA、ないしは YA 文学と省略）やクロスオーヴァー文学（以下、表の中では CO 文学と省略）を加える点、(3) 英語多読学習で読んだ書籍や関連する書籍を日本語でも読むことをすすめる点、にまとめることができる。以下各節で、個別の特徴について説明する。

(1) 英語多読学習と生涯教育の連携

本プロジェクトの特徴としては、第一に英語多読学習を母語である日本語の読書習慣の定着、強化に結び付けようとする点が挙げられる。そのため本稿を理解するために「英語多読学習」に関する基礎的な知識も必要であるから、ここに英語多読学習とはどのような学習法であるのかを簡単にまとめる。多読学習に関する研究は多数存在するが、本プロジェクトは英語多読学習自体をゴールとするプロジェクトではないため、その先行研究等を参考文献に列挙することを避けたい。先行研究に関する詳細については『日本多読学会紀要』(2007~)、拙稿「新居浜工業高等専門学校低学年向け英語多読学習プロジェクトの点検」(2009) 等を参照されたい。[5]

英語多読学習は、日本においては 1990 年代以降、主として高等教育機関で広がった英語学習法である。ただ、この学習法はアメリカ合衆国の国語教育の現場では、既に 20 世紀初めにはハロルド・パーマー（Harold Palmer）らにより、実践されるようになっていた。そして 20 世紀の半ばになると、日本の国語教育の現場でもこの学習法が導入されるようになった。さらに 1980 年代に酒井邦秀らの研究があらわれると、[6] 主として国語教育の教授法であった多読学習法が、日本の英語教育現場で注目され始める。「朝の読書」も同様に 1980 年代の産物である点は興味深い。そして全国語学教育学会（JALT）の出版物『ザ・ランゲージ・ティーチャー』(*The Language Teacher*) 1997 年 5 月号が多読学習を特集し、[7]

翌年1998年にハワイ大学のリチャード・デイ（Richard R. Day）と文教大学のジュリアン・バンフォード（Julian Bamford）が、『多読で学ぶ英語――楽しいリーディングへの招待』（*Extensive Reading in the Second Language Classroom*）で方法論を確立すると、それは20世紀末日本の英語教育現場に急速に普及した。[8] デイとバンフォードによる著作の第7-8頁に示された「多読学習の10原則」を授業で使用するために筆者が簡潔にまとめたものが（表1）である。

（表1）　多読学習の10原則

1	読みものは簡単（わからない単語は1頁2語程度まで）
2	多様な読みもの、トピックを選択可能
3	読みたい本を自分で選ぶ
4	可能な限り継続してたくさん読む（最低週1冊程度、半年以上）
5	辞書の使用は避けスピーディに読む
6	目標は楽しみ、情報獲得、概略的理解
7	一人で静かに
8	読むこと自体がゴール
9	指導者が方向性を定める
10	指導者は模範的読者となる

（2）ヤングアダルト、クロスオーヴァー文学の利用

本プロジェクト第二の特徴は、英語多読学習導入のための書籍準備段階で、例えばペンギン・グレイデッド・リーダーズ（Penguin Graded Readers、以下、PGRと省略）など英語多読学習用に開発された教材に加えて、英語圏の若者向けに書かれた、ないしはマーケティングされたヤングアダルト文学や、子どもから大人まで幅広い読者層に読まれ、ないしはマーケティングされた文学であるクロスオーヴァー文学を準備し、学生に英語で読むことを促した点である。計画当初はヤングアダルト文学のみを購入対象として考えていた。しかし、ヤングアダルト文学に関する予備調査をすすめると、この二つの文学カテゴリーは共通点が多く、読者層もしばしば重なることが判明したため、後者も購入し、研究対象とすることとした。実際には、映画化された作品や、タイトルは知っていても読んだことはなかった、いわゆる「名作」を多く含むクロスオーヴァー文学を教室内で読む学生に遭遇することも多く、学生の読書記録からもそれは明らかであった。ただ、学生に二つのジャンルの違いを教えることが本プロジェクトの目的ではないため、2014年度アンケートは学生の混乱を避けるために、ヤングアダルト文学とだけ表記している。

若者向けに書かれたヤングアダルト文学が、比較的英語力の高い学習者の第二言語および文化の学習に有効である点はヨンガン・ウー（Yongan Wu）が既に2008年の論文「ヤングアダルト文学の上級ESLクラスにおける教授」（“Teaching Young Adult Literature in Advanced ESL Classes”）で指摘している。[9] さらに、形式・内容的にも若い読者に読みやすくデザインされていることの多いヤングアダルト文学が、カレン・ボーラッシュ（Karen Ballash）やクリス・クロウ（Chris Crowe）らの1990年代の研究が示す通り、読

解力の十分でない読者や「消極的読者」（reluctant readers）に読む楽しみを伝え、「生涯読み続ける読者」（lifelong readers）として教育するために、北米の国語授業で教材として用いられていることも、本プロジェクトがヤングアダルト文学を、北海道情報大学図書館の多読学習用書架に加えた理由の一つである。[10]

ここでクロスオーヴァー文学を大学図書館の蔵書に追加した背景も説明したい。レイチェル・ファルコナー（Rachel Falconer）が 2009 年に出版した研究書に詳しいが、ハリー・ポッター・シリーズの人気が端的に示す通り、近年では本来子ども向けに書かれた書籍が、想定された読者グループより高い年齢層の読者に楽しまれる傾向が強い。[11] このように本来子ども向けに書かれた書籍は、必ずしもというわけではないが、比較的語彙や表現の面で理解しやすいことが多い。ことに、先ほど例に挙げたハリー・ポッター・シリーズなど広くその内容が膾炙した大衆的作品に関しては、読者が内容をあらかじめ知っていることも多い。このような場合、語彙力が十分でない第二言語学習者でも、既習の知識から内容が類推できる。そしてこの「類推」（guessing）のスキルは、辞書をできるだけ使わずに読める書籍を選択し、わからない単語を類推しながら読みすすめる英語多読学習で培う重要なスキルでもある。

（3）英語で読んだ書籍を母語でも

本研究の第三の特色は、英語多読学習で読んだ書籍や関連の書籍を母語で読むことをすすめる点である。英語多読学習では（表 1）の 6 で示した通り、原則的に読んだ書籍の詳細は問わない。本プロジェクトでも、読んだ書籍の内容を詳細に確認することはない。しかし、英語多読学習で読んだ書籍、ないしは関連する書籍を母語で読むことは、日本語の読書量を増加させるのみならず、英語多読学習を実施するとしばしば聞かれる「自分が本当に理解できているのか」という学生の疑問へのひとつの答えとなり得る。

そして、本プロジェクトにおいてこのプロセスは、学生が英語多読学習から読書へと移行していくためのきっかけづくりとして重要な機能を持つ。前節で述べたとおり、ヤングアダルト文学やクロスオーヴァー文学を英語多読学習用の書籍に加えたのは、学生が関心をもちやすい内容の書籍を増やすためである。本稿冒頭で言及した飯田の研究によれば、日本の中高生は、ライトノベルと呼ばれるエンターテインメント性の高い文庫サイズの書籍を好む。そして、ゲーム、サイエンス・フィクション、ファンタジーなどからの影響が強いその内容は、欧米文学におけるヤングアダルト、及びクロスオーヴァー文学と重なることが多い。したがって、英語多読学習でこれらのテクストを読んだ学生が、かつて日本語で読んだことのあるライトノベルを「再発見」し、それをきっかけに読書をはじめることが期待される。

もちろん大学生の読書は、学術的な知識やより古典的な教養を求めるべきだ、という意見もあるであろう。しかし、その詳細はサラ・ハーツ（Sarah K. Herz）とドナルド・ギャロ（Donald R. Gallo）により1996年に出版され、ヤングアダルト文学の研究者のあいだでは既に「古典」となりつつある研究書『ヒントンから「ハムレット」へ』（*From Hinton to* Hamlet）に譲るが、ヤングアダルト文学は古典文学への橋渡しとして欧米の教育現場で用いられている。そしてクロスオーヴァー文学の多くが、時代と世代を超えて読み継がれたなじみ深い文学であり、本プロジェクトで使用されているPGRもそれを多分に含んでいる。[12] こうした理由から英語多読学習をきっかけに比較的娯楽性が強いとされるこれらの文学を読むことを学生にすすめることは、古典的教養の涵養といった面でも決してマイナスとはならない。

本稿冒頭でも述べたが、このプロジェクトの主たる目標は、「生涯学習」の礎を築くことであり、現在形で「教養」の獲得を目指すというよりは、読書習慣のない学生に読書の楽しさを伝え、むしろ中等教育終了まで読書習慣を形成しつつあった学生についてはそれを何らかの形で維持し、さらに可能ならば次のステップである生涯教育へとつなげることが目標である。そのため、ここでは学生が読む書籍の内容やレベルは問わないこととする。筆者はむしろ学生が内容的には娯楽といえるような書籍を探すために、図書館や書店に出向き、それをきっかけに書籍を手に取ってくれることを期待するのである。

上述の特色をもつ「多読to読書」プロジェクトは、2012年度から書籍準備、予備調査を行い、2014年度より実施し、同年度中に本章（2）に示したヤングアダルト、クロスオーヴァー文学の導入までの過程を終了した。2014年4月、前期開講時に本章で紹介した英語多読学習10原則を含む多読学習、図書館での多読用図書設置場所の確認を含む導入を行い、5月には授業内でPGRを中心に多読学習を開始した。週1回90分、年間30回の授業内では当初は2週間に1回程度、後期後半にはほぼ毎回、1回につき20分程度の多読学習を行った。学生には読んだ書籍の情報やページ数を記録する用紙と希望制で記入するブック・レポートの用紙を保存用の個人ファイルとともに提供し、各自授業の際にボックス・ファイルから取り出して記入させた。

ヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学は、夏季休業中に学生が読書することを期待して、前期テスト前に導入した。また、多読学習へのモチベーションを上げるため、希望者には簡単なレポート課題を与え、提出者には若干の加点をすることとした。後期開始後、10 月にヤングアダルト、クロスオーヴァー文学に関しては再紹介するとともに、実際にベトナム戦争等教科書で扱っていた内容と関連させる形で、書籍を教室に持ち込み学生に紹介した。（表 2）は 2014 年度の実施の状況をまとめたものである。

（表 2）　2014 年度　基礎英語

4月16日(前期　1回)	英語多読学習導入
5月21日(前期　5回)	授業内多読学習開始
7月23日(前期14回)	YA,CO 文学導入
10月22日(後期　5回)	YA,CO 文学
10月29日(後期　6回)	YA 書籍紹介
11月12日(後期　7回)	アンケート実施

「英語多読学習として英語で読んだ書籍、ないしは関連する書籍を日本語で読む」という、本プロジェクト第 3 プロセスの実施およびその研究に関しては、2015 年度に 2 年次生以上を対象とした「実用英語」の授業で実験中である。そのため本稿ではその詳細には触れない。次章では 2014 年 11 月に実施した、本プロジェクトに関するアンケート調査を分析し、学生のヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学も含めた、英語多読学習に対する反応を明らかにする。

2. アンケート調査：　プロジェクトに対する参加学生の反応

第 2 章は、2014 年 11 月のアンケート調査から明らかになった、プロジェクト実施クラスの反応を集計し報告する。2014 年度に筆者が担当した基礎英語クラス履修者のうち、48 名の学生から協力をいただいた。つまりアンケート当日は、学年当初の履修登録者のうち約 2 割が欠席していたことになる。アンケートは 17 項目からなり、冒頭 Q1 ～ Q3 は英語多読学習法の認知度を確認するもの、Q4~Q9 は本プロジェクトが多読学習に使用したヤングアダルト文学に関する学生の反応を問うもの、Q10~Q12 は多読学習と学習・読書一般の関連性を問うもの、Q13 ～ Q17 は英語多読学習者の読書傾向を問うものである。なお、設問については（表 3）に示す。

（表 3）　2014 年度アンケート設問

Q1	多読学習という英語学習法を聞いたことがありますか？
Q2	Q1 で「a)　はい」を選択した学生にお尋ねします。多読学習について知ったのはいつですか？
Q3	Q2 で「d) 大学入学後」を選択した学生にお聞きします。どの教員のクラスで聞きましたか？
Q4	ヤングアダルト文学（以下、YA 文学）という言葉を聞いたことがありますか？
Q5	Q4 で「a) はい」を選択した学生にお聞きします。いつ、どこでその言葉を聞きましたか？
Q6	Q5 で「d) 大学入学後」を選択した学生にお聞きします。どの教員のクラスで聞きましたか？

Q7	Q1 と Q4 の両方で「a）はい」を選択した学生にお尋ねします。実際に YA 文学を読んだことがありますか？
Q8	Q7 で「a）はい」を選択した学生にお尋ねします。読んだ本の作品名と作家名、ないしはそのどちらかを教えてください。
Q9	YA 文学とは若者を中心的読者層として書かれた、マーケティングされた、ないしは若者に人気となった文学を指しますが、それを日本語ないしは英語で読んだことがありますか？または、これを機に、読んでみたいと思いますか？（複数回答可）
Q10	既に多読学習に取り組んでいる人にお聞きします。図書館に多読学習用の図書を借りに行き、ついでにほかの日本語の本を借りることはありますか？
Q11	Q10 で「a）はい」を選択した人にお聞きします。そのとき借りた本は学習用の本ですか、それとも娯楽用ですか？
Q12	Q11 で「b）娯楽用」を選択した人にお聞きします。具体的にどのようなジャンルの本を借りましたか？
Q13	多読学習に取り組んでいる人にお聞きします。学習用にペンギン・リーダーなどの多読向けに開発された図書以外の英語で書かれた図書を借りたことがありますか？
Q14	Q13 で「a）はい」を選択された人にお聞きします。ペンギン・リーダーと同じ棚に入っている YA 文学を手に取ったことはありますか？
Q15	Q14 で「a）はい」を選択された人にお聞きします。実際にその本を借りましたか？
Q16	Q15 で「b）いいえ」を選択された方にお聞きします。なぜ、YA 文学を借りなかったのですか？（複数回答可）
Q17	Q15 で「a）はい」を選択された方にお聞きします。日本語でも YA 文学、ないしは若者に向けて書かれた文学を読んでみたいと思いますか？

（1）英語多読学習に関して

多読学習法の認知度及び認知時期を問う Q1、Q2 から、このグループの学生のほぼ 9 割（43 名、89.6%）の学生が英語多読学習を知っていることがわかる。うち 7 割強（約 74%）の 32 名は、大学入学後に英語多読学習法を知ったという。また、Q3 への回答から、これらの多読学習法を大学入学以降に知った学生はすべて、本プロジェクトを実施中の基礎英語クラスで知ったことがわかる。このことは、授業内で紹介される学習法の影響力を示す。実に 7 割を超える学生が、本クラスを履修しなければ当該の学習法を知る機会がなかった可能性がある。

一方で少数ながらも、大学入学以前にこの学習法を知った学生もいる。彼らのうち、3 名は中学校、8 名は高校時代にこの学習法に触れたと回答している。

（2）ヤングアダルト文学に関して

次に、アンケートのヤングアダルト文学に関する調査項目についての学生の反応であるが、ヤングアダルト文学の認知度を問う Q4、Q5 によれば、48 名中 40 名（約 83%）が調査の時点で、ヤングアダルト文学という言葉を知っていた。うち、5 名は高校時代にこの語に触れていたが、大学に入ってからその言葉を知った学生のすべてがそれを基礎英語の授業を通して知っていた。この結果から、多くの学生は英語多読学習という学習法同様に、ヤングアダルト文学というジャンルに対しても、本プロジェクトに参加するまではな

じみを持っていなかったことがわかる。

また、本稿第1章とも関連するが、ヤングアダルト文学を知っていると回答した40名の学生のうち、実際にそれを外国語で読んだことがある学生は、わずか6名（15%、全48名中では12.5%）程度に過ぎないこともわかった。一方で、日本語でのヤングアダルト文学の読書経験やそれに対する関心を問うQ9への回答からは次節との関連で重要な情報が得られた。日本語でヤングアダルト文学を読んだことのある学生は、グループの3割を超えており（48名中15名）、さらに約33%（48名中16名）が同ジャンルの作品を今後読んでみたいと回答しているのである。この結果は、少なくとも3割を超える学生が、このジャンルに興味を持っていることを示すとともに、このグループから今後、英語ないしは日本語でヤングアダルト文学をあらたに読みはじめたり、ヤングアダルト文学との再会を機に、再び本を読み始める学生が出てくる可能性を示唆している。

（3）英語多読学習と読書行動の関連

Q10～Q12は、英語多読学習が学生の足を図書館に向け、読書ないしは学習するための動機づけ、あるいは生涯学び続けるために必要な読書習慣づくりのきっかけになり得るかどうかを問う質問群であり、本プロジェクトにとっては重要である。多読学習用図書を借りる際に、ついでに他の図書を借用した経験の有無を問うQ10への回答によれば、4分の1の学生（12名）が多読図書を借りに行ったついでに、和書を借用した経験を持つことがわかった。これは、英語多読学習が図書館に学生を向かわせる動機づけとして機能している可能性を示す一例である。このグループの12名のうち、半分強の7名の学生は学習用、残りは娯楽用の書籍を借りている。また、娯楽用の書籍を借りていると回答した学生のすべてが、純文学を借りていた点は興味深い。彼らについては、既に安定した読書習慣を持ち、習慣として本を借りている可能性がある。

一方で多読学習者に多読学習用に開発された書籍ではない書籍の借用経験、読書経験を問うQ13~Q15への回答を分析すると、少し残念な結果も明らかになった。48名のうち17名(35%)は多読用図書ではない英語書籍を借りたことがある。この17名のうち12名(約70%）は、いちどはPGRと同じ棚に用意してあるヤングアダルト文学を手に取っている。しかし、彼らのうち、実際にヤングアダルト文学を借用したのは8名に過ぎず、多くの学生は手に取ったヤングアダルト文学を棚に戻してしまっているのである。より多くの学生に手に取った本を借用し、さらには実際に読んでもらうために、借用時に働く消極的要因を明らかにしようとするQ16の結果は重要であろう。この設問への回答から、実際にヤングアダルト文学を手に取ったものの借用に至らなかったグループにとって、難易度や持ち運び易さではなく、「書籍の長さ」が最大のネックとなっていたことがわかる。

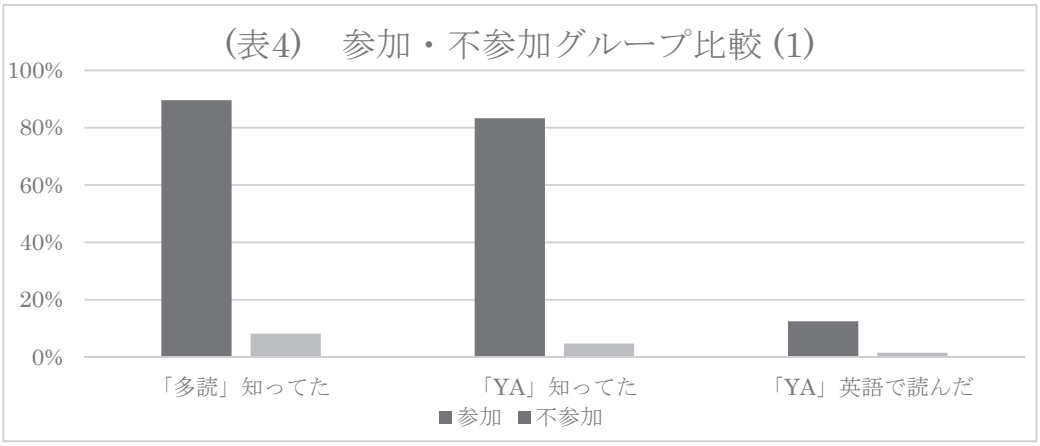
Q17 は逆に、ヤングアダルト文学を借用に至った学生群に対して、今後日本語でヤングアダルト文学を読もうと思うかを問うものであるが、このうち 1 名を除いて 7 名（87%）が既に読んでいる、ないしは、これから読もうと思うと考えていることがわかる。Q11~Q12 とも関連するが、読書に対して積極的な態度を示す学生群のプロジェクト開始以前の読書経験、および読書習慣について研究することで、読書への興味がこのプロジェクトで培われたものであるのか、それとも大学入学以前に培われた読書習慣の延長であるのかをあきらかにすることは、今後の研究課題のひとつとなる。

次章では本章でまとめたプロジェクト参加クラスのアンケート結果をプロジェクトに不参加のクラスのアンケート結果と比較し、本プロジェクトの可能性、さらには 2015 年度の追跡調査時に注目すべき点等をあげてゆく。

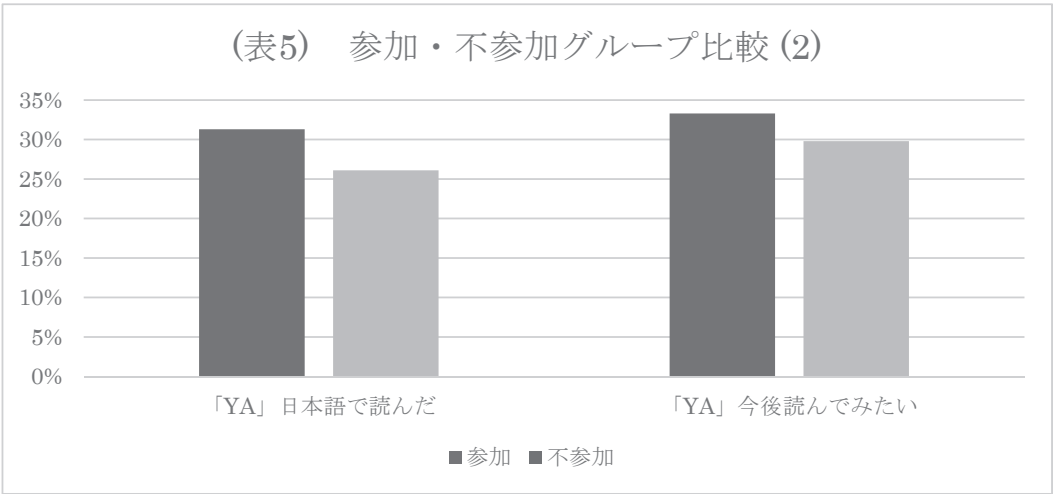
3. アンケート調査結果の分析：　参加グループと不参加グループの比較

第 2 章では、2014 年度に「多読 to 読書」プロジェクトに参加した学生の同プロジェクトに対する反応をまとめた。第 3 章では学生の反応をプロジェクト不参加グループのそれと比較分析し、本プロジェクトが参加した学生に与えた積極的な影響力、並びに計画当初では予想できなかった結果等についてまとめていきたい。

本プロジェクト最大の積極的影響力は、英語多読学習に関する知識と経験、そして英語・日本語両言語での読書のきっかけとなりえるジャンルとしてのヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学に関する情報を学生に与えたことである。プロジェクトを実施した 2 つのクラスに所属し、アンケート調査に協力した 48 名のうち、ほぼ 9 割の学生が英語多読学習法、8 割がヤングアダルト文学というジャンルを認知しており、約 1 割が英語でヤングアダルト文学に取り組んだ。本プロジェクトの影響力は、プロジェクトに参加していない学生 134 名を対象に、同時期に行った同じアンケート調査と比較すると明らかである。このグループで英語多読学習法、ヤングアダルト文学を知っている学生は前者については 11 名（8.2%）、後者については 6 名（約 4.4%）と 1 割に満たない。さらに実際にヤングアダルト文学を英語で読んだ学生は 134 名中 2 名、つまり 2% に満たない（約 1.5%）ことがわかる。実験に参加したグループでもヤングアダルト文学を英語で読んだ学生は少ない。しかし、知らなければ学習のスタートラインにすら立てないことを考えれば、この結果はマイナスではなく、むしろ本プロジェクトのもつ可能性を浮き彫りにするであろう。二つのグループの比較の結果を簡単にグラフ化したものが（表 4）であるから、参照されたい。



一方で、日本語でヤングアダルト文学を読んだ学生の割合は差が少なく、プロジェクトに参加している学生のほうが約 5% 高い程度である。さらにヤングアダルト文学へ関心を持つ学生の割合についても、大きな差がなかった。アンケートで今後同ジャンルを読んでみたいと回答した学生は、プロジェクト参加学生中の 16 名（約 33%）であるのに対して、その他の学生のグループでも 40 名（約 30%）いる。ここから、適切な導入がなされれば、後者のグループの学生のヤングアダルト文学読書率も向上する可能性が高いことがわかる。これらについては（表 5）を参照いただきたい。



また、本調査からは、現在はプロジェクトに参加していないグループの学生の将来的発展についても希望的な結果が得られた。本プロジェクトの教養教育、生涯教育的意義として注目するべきは、前章でも言及したが、プロジェクトに参加し、英語多読学習に取り組

んでいる学生の４分の１が多読学習の書籍を図書館に借りに行った際に、それ以外の書籍も借りている点である。プロジェクトに参加していないグループの学生のうち、英語多読学習を実践している学生は１名のみであるが、その１名も、多読学習のついでに本を借りた経験を持っている。

この点から本プロジェクトの一部である英語多読学習は、学生が図書館に足を運び、多読学習以外の本を借りるきっかけとして機能する可能性が高い。本プロジェクトは研究計画の段階では、英語多読学習を通じて読んだ作品の日本語訳や関連作品を読むことによって、学生の読書量を増やし、読書習慣を定着させることを主眼としていた。しかし、このアンケートは異なるプロセスで読書量が広がってゆく可能性を示した。すなわち、英語多読学習は、書籍を借用するために図書館を訪問する機会を増やすため、学生のいわば「ついで読書」の機会も増幅するのである。

一方で、アンケートの結果、プロジェクトに参加した学生のうち 25% が英語のヤングアダルト文学を手に取ったものの、実際にそれを読んだ学生は１割程度にとどまった事実が明らかになった。この結果は今後プロジェクトを継続し、学生の読書傾向を追跡調査する際に留意しなければならない。詳細は他稿に譲るが、この結果を受けて、より多くの学生にヤングアダルト文学やクロスオーヴァー文学を読んでもらうために、2015 年度プロジェクトでは、北海道情報大学図書館に所蔵されている英語で書かれたこれらの作品とその日本語訳の蔵書の有無を簡単に検索できるウェブサイトを制作し、実験的に授業内で使用することとした。終章では本章にまとめた分析結果を受けて、予想外の展開への対応も含めて、2015 年度のプロジェクトの実施及び調査への展望をまとめる。

むすびにかえて：　2015 年度プロジェクトおよび調査への展望と課題

本稿は 2014 年度入学生を中心として行った「多読 to 読書」プロジェクトの概要、および 2014 年度中に実施された同プロジェクトの一部（英語多読学習およびヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学の導入過程）とそれに対する学生の反応をまとめた。調査によれば、プロジェクトは参加した学生の間で英語多読学習、ヤングアダルト文学の認知度を高めるために一定の効果を持っていると考えられよう。ただ、英語多読学習がプロジェクト参加者の間で定着するか否か、ならびに英語多読学習を日本語の読書に結びつけられるか否かに関しては、2015 年度プロジェクトの結果を待たねばならない。

最後に 2015 年度にプロジェクトおよびその調査を継続するにあたり、留意しなければならない点をまとめる。第一の問題は 2014 年に基礎英語を履修した１年生のうち 2015 年に筆者の担当する実用英語を履修した学生は今回のアンケートに参加した 48 名の学生のうち７名に過ぎないという点である。少ないサンプルから、多読習慣の定着の如何もふく

め、学生の2年間にわたるプロジェクト全体への反応を的確に引き出すために、2015年度は選択回答式アンケートと併用してインタビュー調査を行う。特に自律的な読書習慣が身についたと思われる学生については、本プロジェクトの効果を検証するために、プロジェクト導入前に読書習慣があったのかどうかをインタビューによって調査しなければならない。

また、(表1）に示された英語多読学習の原則9及び10にあるとおり、英語多読学習ではプロジェクトをコントロールする指導者が重要な役割を担う。そこで、2014年度にプロジェクトに参加したものの、2015年度は指導者を欠いた学生が、読書習慣を自律的に継続しているか否かについても調査し、プロジェクトに継続参加したグループの読書習慣と比較することで、プロジェクト終了後に学生が自主的に読書習慣を維持する可能性を探りたい。そのために2014年度同様、他クラスを担当する教員の協力を得、2014年度に筆者が担当する基礎英語を履修し、2015年度は筆者担当の実用英語クラスを履修していない学生についても追跡調査したい。

さらに、前章末にも言及したが、2014年度に本格的な取り組みがなされず、良い結果が出ていない、ヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学を使って英語多読学習と日本語による読書を橋渡しする試みに関しても、2015年度は、学生の両ジャンルに対する興味を喚起するため、ヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学についての情報や書籍紹介、検索用のウェブサイトを制作し学生に提供することによって一層取り組んでいきたい。

上にあげた点に配慮し、2015年度も滞りなくプロジェクトを実施し、その結果の調査および分析に努めたい。

本プロジェクト（研究課題名「多読 to 読書」: YA 文学を利用した英語多読教育から生涯教育への橋渡し、課題番号24653233、平成24~27年度）は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金、挑戦的萌芽研究）により可能となりました。関係者の皆様に感謝申し上げます。そして誰よりも、北海道情報大学図書館職員、北海道情報大学の学生、卒業生の皆様、さらには貴重な授業時間を使い、アンケートを実施してくださった諸先生方に感謝を申し上げます。

註

(1) 「4割読書時間ゼロ」『日本経済新聞』(2014年2月27日), 47.
(2) 飯田一史『ベストセラー・ライトノベルのしくみ』（青弓社 , 2012), 329-30.
(3) 林公『朝の読書――その理念と実践』（リベルタ出版 , 2007), 51.

(4) 「朝の読書」, TOHAN, 2015, http://www.tohan.jp/csr/asadoku/index.html (accessed 26 Nov. 2015).

(5) 「日本多読学会　授業報告・資料・論文紹介サイト」, 日本多読学会 , 2014, http://www.jera-tadoku.jp/papers/index.html (accessed 23 Feb. 2016). 日本多読学会のウェブサイトには同学会紀要の他、多読学習関連の論文、報告等がまとめられている。同サイトにも紹介されているが、特に理系の学生について TOEIC や ACE 等の得点と読書量の関連性を数値で明らかにする、豊田工業高等専門学校の西澤一、吉岡貴芳らを中心とする研究群はしばしば引用されるので、以下に一件のみ紹介する。西澤一他「英語多読学習が効果を上げるしくみと成否要因に関する一考察」『工業教育』59.4 (2011): 66-71. 拙稿に関しては、以下の通り。荒木陽子「新居浜工業高等専門学校低学年向け英語多読学習プロジェクトの点検」『新居浜工業高等専門学校紀要』45 (2009): 1-9.

(6) ここでは 1980 年代の研究の例として、酒井邦秀の以下の文献を紹介する。「英語の多読授業：実践例に見る問題点と可能性」『電気通信大学学報』33, no. 2: 395-407.

(7) JALT, Extensive Reading, Spec. issue of *The Language Teacher* 21, no. 5 (1997).

(8) Richard R. Day and Julian Bamford, *Extensive Reading in the Second Language Classroom* (New York: Cambridge UP, 1998). 同書については、桝井幹生による翻訳が、2006 年に松柏社より出版されている。

(9) Yongan Wu, "Teaching Young Adult Literature in Advanced ESL Classes," *The Internet TESL Journal* 14, no. 5, The Internet TESL Journal, May 2008, http://iteslj.org/Articles/Wu-YoungAdultLiterature.html (accessed 26 Apr. 2012).

(10) Karen Ballash, "Remedial High School Readers Can Recover, Too," *Journal of Reading* 37, no. 8 (1994): 686-87; Chris Crowe, "Young Adult Literature: Rescuing Reluctant Readers." *The English Journal* 88, no. 5 (1999): 113-16.

(11) Rachel Falconer, *The Crossover Novel: Contemporary Children's Fiction and Its Adult Readership* (New York: Routledge, 2009). クロスオーヴァー文学に関しては、野上暁『越境する児童文学――世紀末からゼロ年代へ』(長崎出版 , 2009) も詳しい。

(12) Sarah K. Herz and Donald R. Gallo, *From Hinton to* Hamlet*: Building Bridges Between Young Adult Literature and the Classics* (Westport: Greenwood, 1996).